

使徒の働き 2 : 1 - 4 7 (パウロ)

Preface

今年の元旦礼拝の時にもお話しさせていただきましたが、聖書の最初の書物創世記を見ますと、ノアの洪水のノアが生きた時代に、天地万物をお造りになられた主なる神様が、洪水をもってこの地をお裁きになったことが記されています。

大洪水の後、ノアの子孫たち、つまり、ノアから生まれ地上に分かれ出たもろもろの国民は、神への敵対を表すためにバベルの塔を建て上げました。

神様が今一度、洪水をもって裁くようなことがあった時には、自分たちが建てた高い塔に上り、洪水に打ち勝とうという思い、神への無礼と言いましょか、ぶしつけな考えからバベルの塔を建て、自分たちの力を誇示してみせました。

これに対する神様の人類への刑罰が臨みます。

その刑罰とは、一見、とても風変わりなものに見えました。

天から火と硫黄のようなものを降らせたわけでもなく、再び大水をもって大洪水を起こされたわけでもありませんでした。

彼らの話し言葉を、全地に住む人々の言語を混乱させるというものでした。

創世記 11 章の記述によりますと、それまでのこの世界・全地は一つの話し言葉であり、一つの共通の言葉で意思疎通を図っていましたが、全地の話し言葉が混乱してしまったために、人々は互いに言葉が通じなくなりました。

言葉が通じ合いませんから心が通じ合わず、心が通じ合いませんので、一緒に住むことが出来なくなり、地の全面へと散らされ、散って行きました。

互いに言葉が通じず、心が通じ合わなくなったために、結局、互いに敵となり、仇となり、いがみ合い、互いに譲らず、対立し、互いに境界線を引き合いながら、自分たちの正しさを主張し合いながら、争いが起こり、紛争が起こり、戦争が起こる、他に地獄がないとも言えなくもないような世界となりました。

この出来事以降の世界、即ち、創世記 11 章以降の聖書の記録が、戦争の話一色なのはそのせいです。

神様のせいではなく、人の神へ対する敵対心が、人と人が争う戦争を生んでいきました。

そうして言葉が通じ合わなくなったことゆえに生じた最も深刻な問題こそが、先ほど言いましたように、互いに心が通じ合わなくなったということです。

Part One

神への敵対心は、このノアの時代に始まったわけではなく、遡ること創世記

3章の善悪の知識の木から取って食べるという神から禁じられたことをやりのけたというあの事件からです。

神様から「取って食べてはならない」と言われ、「食べません」と約束したにもかかわらず、神との約束を破り、善悪の知識の木から取って食べるという根本的な悪事「最初の嘘つき」を働いた後から、私たち人間の身に脈々と代々受け継がれ身に沁み付くようになった私たち人間の本能的罪が、「神への敵対心」です。

「私が神だ。私の人生の主人は私だ」という、どんなに神から禁じられていても、私の目に慕わしく、私の好みに合い、私の欲望を駆り立てるならば、そうする。

神からの愛の助言、神との愛の約束、神との親密な関係よりも、自分の欲望に忠実で、自分の判断に従って、取りたければ取り、食べたければ食べるという利己的な欲望です。

そのような心持ちであるわけですから、人同士でさえも、互いに心が通じるはずがありません。

そのようになって人は、神なき利己的な生き方を選び取って行ったために、内に住んで下さる神の霊を失うという人としての本来の姿を喪失してしまいました。

神の霊の代わりに利己心をもって自分を支配させ、この地に、この世界に、日々の暮らしに混乱を来すようになり、対立し、いがみ合い、自分の間違いを認めず、また相手の間違いを自分の考える正しさをもって支配しようとし、「すべて私の物だ。すべて私の物となればいい」と潜在的な欲望には忠実で、争いが絶えなくなりました。

「これらすべてのことが、唯一の神様のことを嫌がり、神の霊を失ってしまったためだ」と、聖書は教えます。

これに伴い生じたまた一つの問題が、分別力がなくなるということです。霊的分別力がなくなり、人間が愚かと言いましょうか、間抜けになりました。あたかも人は、とても知恵深く、深い知性があるかのように装うそぶくものの、根本的な分別力を失ってしまいました。

本物と偽物、真理と不真理、本当の祝福と偽りの祝福を見分けることが出来なくなり、間違った判断、間違った決定で、神の前に悪しき者となってしまったことを露呈し、それでも誰かを、恐れ多くも神までも嘲る者となり、神の前に不法を行う者となって、結局人生において、最終的な敗北、究極的な敗北、最大の敵である死を前にして成す術なく滅びて行くようになってしまいました。

## Part Two

私たち人間に、この人間社会にどれほどに分別力がないのかを一つ例を挙げますと、人間自ら作ったこの文明社会をどれだけ自画自賛したところでその内実は、一歩ずつ滅びに向かっているということを神を信じない専門家と言われ

る方々も指摘している程だということです。

人間が作り出したこの文明社会、ゴミだらけで、結局そのゴミの処理に困って埋もれるようにして、放っておいても滅びると言うのです。

「天国にはゴミ箱がない」という話を聞いたことがありますでしょうか？

なぜ天国にはゴミ箱がないのかと言いますと、神様がお造りになったものは、ただただ互いに支え合い、互いに補い合い、互いに手を取り合いながら、互いの存在をもって全てが成り立っている関係だからです。

あるクリスチャンの生物学者が、創世記に記されている神が創造されたこの地球上の天然世界は、生産者と消費者と分解者に分かれていると解説しているのを聞いたことがあります。

生産者とは主に植物で、光合成をしながら自ら栄養分を作る生物たちです。

消費者とは、自ら栄養分を作ることが出来ず、生産者である植物や他の動物を食べる生き物であり、分解者とは、死んだ生物の死体や排泄物を分解して自然のサイクルに戻す働きをしながら生きている菌などの微生物を指します。

微生物によって分解されたものをまた植物が摂取し、植物を動物が摂取し、動物や植物を微生物が分解しながら摂取し、微生物が分解したものをまた植物が摂取するという風に、どこまで行ってもこのサイクルは崩されることのない完璧なサイクルで、神がお造りになったもの何一つ無駄なものはなく、すべてが栄養分になり、全てのもものが生きるために、互いに必要な存在同士であり、互いになくしてはならない存在であり、互いに支え合い、互いに補いながら永遠に回ることの出来る循環だと言うのです。

つまり、神がお造りになった天然世界には、ゴミというものが一切存在しません。

そこには、何一つ、サイドエフェクト・有害な副作用がありません。

ところが、人間が作るものは、その循環をことごとく壊し続けてきました。

一つの便利のために10の不便が、いくつもの副作用があるものを作り続け、またその副作用を打ち消そうと何かを作りながらさらに新たな副作用を生みだし、またその副作用を打ち消すためにまた作りと、知恵だ、知識だ、技術だ、科学だと、あたかも知恵深いかのように、知性に溢れているかのように歌ってはいるものの、その内実は、有害な副作用が積もり積もって、神がお造りになったこの素晴らしい循環世界を汚染させてしまっている…

そして、その一度汚染させてしまったこの世界を元に戻すことが人には出来ないにもかかわらず、あたかも出来ているかのように見せかけ、有害な副作用を打ち消すかのように、「新たな良いものを作っている」と言いながら、ゴミではないかのように見せかけながら、またゴミを作り続けている…

クリエイティビティ、創造性なんて言うカッコいい言葉を付けて、副作用だらけの、副作用に汚染されている世界を外側だけきれいな包装紙で包装してしま

っているような世界…

私たち人間の体の病気を治すために作る薬でさえも、副作用が全くない薬なんてない…

今では、人間が作った有害な副作用の残骸であるゴミを、天然世界の生物たちが取り込み、その生物を人間が食するなんていう皮肉なサイクルまで作ってしまい、どうすることも出来なくなっている、まだ、人は人を誇ります。

そして、そのゴミの最たる物の代表が、武器なのかもしれません。

神の似姿に唯一造られた人という尊い存在を一瞬にして殺めてしまう武器という代物に、人の間抜けさ、愚かさがすべてあらわれていると言っても過言ではないかもしれません。

たとえ武器を作らず、武器を持たなくても、自分が武器となって人を傷つけます。

その心を殺めます。

私たちは、「人こそ神だ」と、「自分こそ神だ」と、変わらず神に敵対する世界を変わりなく作り続けてしまっています。

こういった意味で、天国には、ゴミ箱がないんだそうです。

誰かが誰かを、何かを何かを殺めるといふゴミが一切ないところが、神の国であり、天の御国です。

人は、神への敵対心により、分別力を失ってしまいました。

本物と偽物、真理と不真理、本当の祝福と偽りの祝福を見分けることが出来なくなり、間違った判断、間違った決定で、神の前に悪しき者となってしまったことを露呈し、それでも誰かを、恐れ多くも神までも未だに嘲り、神の前に不法を行う者となって、最終的な敗北、究極的な敗北、最大の敵である死を前にして成す術なく滅びるといふ分別力のなさをさらけ出しています。

### Part Three

ところが、そんな神への敵対心が作り出した魔のサイクル、悪しき循環、負の連鎖にくさびを打つ事件が、2000年前の五旬節の日、ペンテコステの日に起こった聖霊降臨の出来事でした。

五旬節の日に、イエス様が仰った言葉に従って、120人ほどの人々が心を一つにして切実に祈っていると、彼らは、イエス様の約束通り聖霊を受けました。

ペンテコステの日に聖霊を受けた彼らに表れた最初の現象は、聖霊が語らせるままに、自分たちがそれまで一度も話したことの無い他国の色々な言葉で話し始めるということでした。

では、聖霊が語らせるままに他国の色々な言葉で話し始めたということの意味は何でしょうか？

この出来事は、バベルの塔を建てた時、混乱して散らされた言語が、再び一つ

となるよう回復したということであらわすものです。

つまり、言葉が通じず、心が通い合わずに人々が全地に散って行ったのは逆に、ペンテコステの日に人々が聖霊を受けると、言葉が通じ合い始めるようになりました。

色んな国々や地方出身の人々が驚き当惑しながら、「あの人たちが、私たちの言葉で神の大きな御業を語るのを聞くとは。いったいこれはどうしたことだろうか」と、言葉が通じ始めました。

どういう言葉が？

どんな内容をもって通じ合い始めたのかと言いますと、「私たちの言葉で神の大きな御業を語るのを聞くとは」、つまり、「神の大きな御業」を聞く・知ることをもって、互いに心が通じ始めるようになったのです。

神への敵対心から、共に神の大きな御業を聞く、知る、喜ぶということをもって、互いの心が通じ始めるようになったのです。

今年の夏に中高生コイノニアがありますが、29年前から、言葉の通じ合わない韓国の中高生たちと日本の中高生たちが、29年前から、「神の大きな御業」を共に聞き、共に知り、共に喜ぶということを通して心を通じ合わせてきました。

私も初めてロシア語圏に言った時、スペイン語圏に言った時、ロシア語も、スペイン語も一切話すことが出来ないのに、「神の大きな御業」を共に聞き、共に賛美するというを通して、心が通じ合うことを体験しました。

散った心が、一つにされるのです。

神への敵対心ではなく、神への愛が、私たち人の心を一つにするのです。

事実、2000年前のペンテコステの日に聖霊を受けた120人の初代教会の信徒たちが語る「神の大きな御業」を通して、「一つになる」という、それまで人の歴史において最も大きな共通の痛みであり、悲願であり、念願であったことを目の当たりにしました。

使徒の働き2:44以降を見ますと、「信者となった人々はみな一つになって、一切のものを共有し、毎日心を一つにして集まり、神を賛美し、民全体から好意を持たれ、主は毎日、救われる人々を加えて一つにして下さった」と書かれています通り、神の前にある人間本来の姿「一つ」ということを回復させて頂いています。

「ふたりは一体となる」というアダムとエバに神様が宣言して下さったあの祝福を回復させて頂いています。

即ち、使徒の働き2章と創世記11章の出来事は、神の御手における歴史的真逆の事件、真反対の出来事だということです。

心が一つになりました。

なぜか？

神の霊を受けるようになるから、世的な欲望がなくなったからです。

使徒パウロ先生が言うように、「自分にとって得であったすべてのものを、キ

リストのゆえに損と思うようになり、主イエス・キリストを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。それらをちりあくただと思っています」(ピリピ3：7-8)という告白と全く同じ思いが、聖霊を受けたすべての人たちに起こりました。

#### Part Four

神の国を望む人、神の国を見上げる人、神の国をその心のうちに抱く人には、この世において得だと思えること、得だとされていることが、ちりあくただと思えるようになります。

世のことに対する欲がなくなるので、争いがなくなります。

以前は富む者もいて、貧しい者もいましたが、この初代教会にあらわれた最も大きな現象が、各自必要に応じて所有を分かち合い、共に用いるということでした。

死に対する恐れや世的な欲がなくなるので、分かち合いという愛が芽生え、平和があり、神の国がそこに成りました。

神の国が成る条件は、ただ一つです。

聖霊によって新しく生まれることです。

聖霊によって新しく生まれることによって、神の国を見ることが出来、入ることが出来ます。

ヨハネの福音書3章でイエス様が、町の有力者の一人であったニコデモにお話しされた話、「人は、水と聖霊によって新しく生まれなければ、神の国を見ることも出来ないし、入ることも出来ません」というお言葉通りです。

神の国のための最も重要な条件は、神の霊によって新しく生まれることです。神の霊によって、考えが、考え方が変わることです。

分別力が変わることです。

霊的分別力がつくことです。

価値観が変わることです。

そして、世的な欲望、生活における思い煩いや、富や、快樂に価値を見出すことがなくなるということです。

ヘブル書10：34の、

#### ヘブル人への手紙10：34 (パウロ)

自分たちにはもっとすぐれた、いつまでも残る財産があることを知っていたので、自分の財産が奪われても、それを喜んで受け入れました。

と言う程に、見つめる先が変わるということです。

そうすればそこに、この地に、平和が訪れ、神の国が、即時臨むことでしょう。

神の霊が人に臨むと、私たちは、神に似た者となります。

天地万物をお造りになられた主なる神様が人間をお造りになられた時、神のかたちにお造り下さいましたが、では、神のかたち、神の似姿に造られたとは何でしょうか？

神様には目が二つあり、鼻が一つで、口が一つという外見的に似ているということでしょうか？

もちろん、イエス様がそうであられたように、そういう面もあるでしょう。

ですがそれ以上に、もっと本質的なものにおいて神の似姿に造られたというのは、同じ神の霊がそのうちにあったということです。

神様は、最初に人をお造り下さった時、ご自身の息・霊を吹き込んで下さり、神の霊が人の内に住まうようになりました。

同じ考え、同じ思い、同じ心、同じ価値観を持つようになり、考えること、行動すること、話すことが、まるで神様が考え、行動され、話されるようになったということです。

第一ペテロを見ますと、こんな御言葉があります。

#### ペテロの手紙第一 4 : 11 a (パウロ)

「言葉を口にするにしても、行動を取るにしても、奉仕をするにしても、神様がなさるようにしなさい。そう出来るはずだから」と言います。

神の霊によって新しく生まれた人は、言葉を話しても神様が話されるように話し、何かの行動を取ろうとしても、何をするにしても、神様の心で、イエス様の心で、神様がなさるようにやると言います。

そうして私たちは、神の証人、キリストの証人となるのです。

クリスチャンという言葉の意味は、「小さなキリスト」という意味ですが、私たちキリスト者を見た方たちが、神様を見るのです。

イエス様を見るのです。

そして、神様は、私たちを小さなキリストとして、私たちを通して人に、神をあらわしなさいます。

だからこそ、「水と聖霊によって新しく生まれなければ、神の国を見ることも、入ることも出来ない」という御言葉が、どんなに重要な御言葉であることか分かりません。

### Part Five

主イエス様が天に上られる際に、弟子たちに念入りをお願いしたことは、ただ一つでした。

「エルサレムを離れないで、父なる神様が約束して下さった聖霊を待ちなさい」ということ、ただ一つです。

その言葉を聞いた 120 名の弟子たちは、イエス様の言葉を守りました。

そして約束通り、聖霊を受けました。

急激な経済発展があり、国民総所得が上がり、科学技術が発展し、日常の暮らしが変わり、物凄く便利になったなんて言うことは一切ありませんでした。

ですが、霊が変わったので、彼らの霊が変わったので、その場所から神の国が成りました。

神の霊によって新しく生まれると、この世の中そのまま何も変わることがなくても、神の霊によって新しく生まれた人がいるその場で、その国で、神の国が成ります。

神の霊によって新しく生まれた人が生活すると、教会も神の国となり、家庭も神の国となり、この世界が神の国となります。

イエス様が、「神の国は、『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです」（ルカ17：21）と仰った通りです。

だから、私たちが最も欲を出し、慕い求めなければならないのは、「神様、聖霊なる神様によって新しく生まれさせて下さい。私の霊を神の霊に変えて下さい。神の霊によって私のうちを新しく変えて下さい。そうして再び、神の似姿を着、神のかたちに造り変えて下さい。私が話せば、神様が話されるようにして下さい、私が行動し、私の生活のすべてのことがイエス様にピッタリ似た者として下さり、真に新しく生まれたイエス・キリストの証人となり、人々が私を見てイエス様を信じるようになり、神の国の尊い働き人となるようにして下さい、神の国をこの地に建て上げる神の同労者となれますように」という切実な祈りがあって初めて、私たちゆえに、このキリストのからだである教会が初代教会のようになり、私たちが生きている家庭や職場や学校やこの世のすべてにおいて、神の国が成るのだと思います。

そうなるよう、主の祝福を願わずにはられません。

そのために毎日、「この霊を神の霊によって満たして下さい」と祈らずにはられません。

## Conclusion

弟子たちがエルサレムを離れずにそこに留まることは危険で、大変なことでありましたが、イエス様の声に聞き従い、切実に祈った時、約束通り聖霊を受けました。

すると、世界が、そこから変わりました。

世の中は何一つ変わっていませんでしたが、神の霊によって新しく生まれたことによって、まず教会が天国、神の国となりました。

平和があり、愛がある、まことの神の国となりました。

もう一度同じことを言います。

私たちが唯一欲を出し、慕い求めなければならないのは、神の霊によって新しく生まれることです。

「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。

たたきなさい。そうすれば開かれます。天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに良いものを、聖霊を与えて下さらないことがあるでしょうか」(マタイ7:7-11、ルカ11:13)とイエス様が仰り、また、使徒の働き1:4、5では、「エルサレムを離れないで、私から聞いた父の約束を待ちなさい。あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです」と仰って下さったにもかかわらず、もし私たちが聖霊によるバプテスマを受けることが出来ていないならば、答えは簡単です。

イエス様が仰った通り、聖霊を求めているからなのでしょう。

世のことは求め、お金は求め、健康も求め、成功を求め、快樂には欲を出して祈りますが、神の霊によって、聖霊によって新しく生まれさせて下さいという切実な祈り、願いがないために、もしかすると、私たちは一生涯、イエス様を信じたとて、他の霊をもって生きてしまうかもしれません。

愛する主にある皆さん、私たちも切実に慕い求める心で、「私にも聖霊によるバプテスマをお授け下さい。聖霊によって新しく生まれさせて下さい。神の霊によって神の似姿とさせて下さい。私たちと、私たちの生活と、私たちの人生が、神の証人となる、キリストの証人となるようにして下さい」と祈り、その祈りの応答を頂き、私と皆さんが生きるこの地が、その場が、私と皆さんのゆえに神の国となる、奇跡のような事実が現実となるよう主の名によってお祈りいたします。

お祈りいたしましょう。

祝祷：ルカの福音書11:13b